

吉田松陰「吉田松陰書簡」

安政6（1859）年3月

国家天下の事、満鬱不平、吾^{われ}

一日も此世に居る事を欲せず。早々

一死を賜り候様、御周旋被下度候。
くだされたく

心事は一々不申共御察被下候而不
もうさずとも くだされ てくるし

苦候。杉蔵頻に母子の情を云、僕
からず しきり いふ

頗不満、然彼が母を思ふは猶吾
すこぶる しかれども なおわれの

思 国 なれは叱られもせず、杉蔵
くにをおもうがごとく

一事さへ議論遅遠する程なれば

政府何を能^{よく}なさん。弁当事放囚事

移局のこと一々出来るとなりと出来ぬと

なりと早々御決議 承^{うけたまわり} たし。杉蔵

母を奉ずる事、国相府 弥御免なきに
こくそうふいよいよ

於ては杉蔵も亦男児なれば余り
また

未練は申間敷、杉蔵未練を
もうすまじく

止めさえすれば 雖在幽囚 吾豈
ゆうしゆうにありといえどもわれあに

無精神哉、武士の一覚悟
せいしんなからんや

屹きつと入御覽可申候事ごらんにいれもうすべく

松陰男子

来嶋君

小田村君

桂君

久保君

(以下略)